



集落を診断し、最適な被害対策を!



サルは群れを持ち、一つの群れが出没する集落はだいたい決まっています。また集落によって出没頻度に差があり、基本的にエサ資源量が多い集落ほど、サルの出没率が高くなる傾向があります。

- ①サルの行動域を把握し、群れの行動特性をつかむ
- ②集落の環境調査を行い、エサ資源を調べる

ことで、集落への出没を抑制するための基本的な情報を把握しましょう。そのうえで、集落条件に応じた対策を選択することが重要です。

①サル群の行動域と集落の位置を確認しましょう

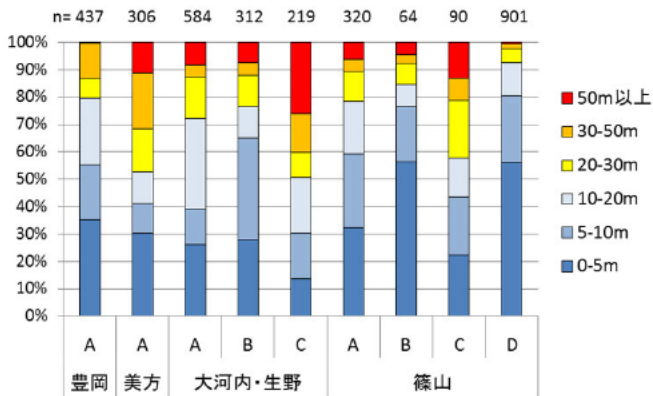


- 行動域の調査には、群れに発信器を装着し、定期的な調査を行うことがベストですが、住民への聞き取り調査でも、概要は把握できます。
- 行動域の中央部の集落は、出没が多くなる傾向があるので、端の集落より労力が必要です。
- 行動域の端にある集落は、追い払い等の効果が出やすく、成果が得やすくなります。
- 地域にサル監視員や巡視員を配置し、群れの追跡調査や行動を監視し、位置情報を住民にメールや放送などで連絡している地域もあります。

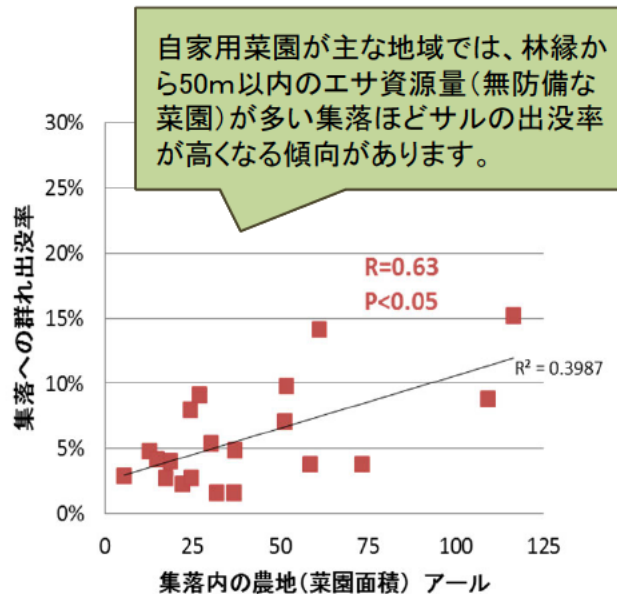
「エサ資源量」が多い集落ほどサルの出没率が高くなる傾向があります

□サルの出没要因となる「エサ」は、無防備な菜園や不要果樹、稲のひこばえや落ち穂など、人が自覚しないエサを含めると、非常に多岐にわたります。

□試験研究の結果、下記のように、これらのエサ資源量が多い集落ほど、サルの出没率が高くなる傾向があることがわかっています。

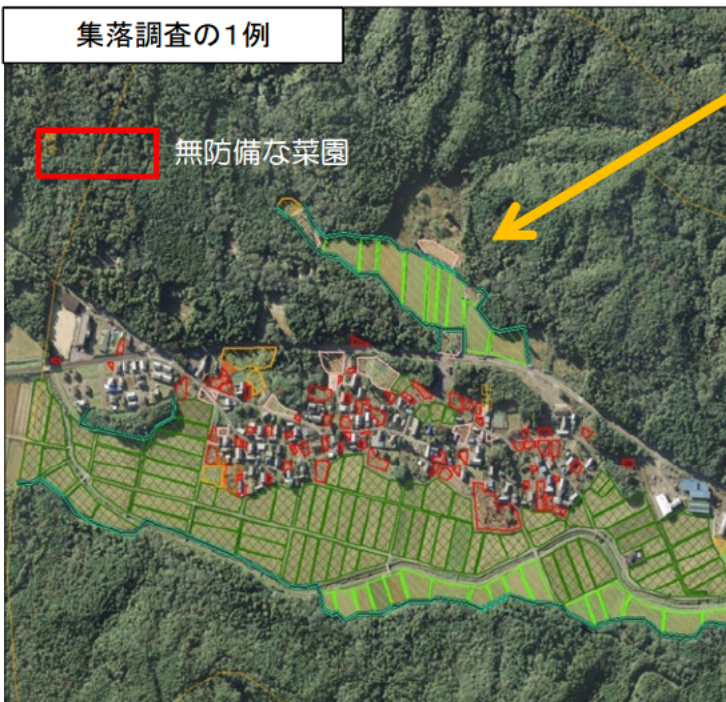


兵庫県に生息する9群を調査した結果、サルが出没している箇所は林縁から50m以内の環境が多いことが分かりました。



② 集落環境調査を行い、集落内の「エサ資源量」を把握しましょう。

集落調査の1例

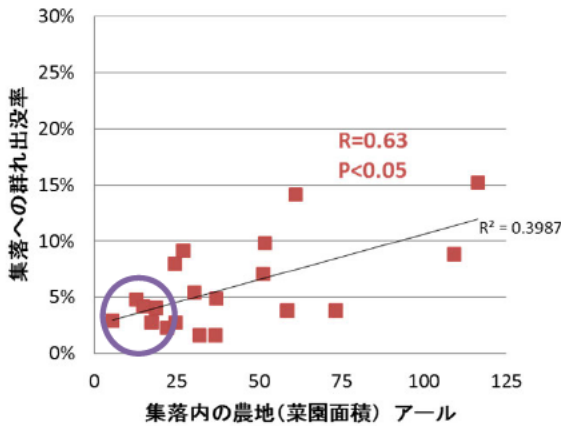


- 林縁から50m以内がサルの出没しやすい場所です(ただし、群れ・季節により異なる可能性があります)。
- これらの環境にサルのエサ資源がどのくらいあるか調べましょう。
- 左図のように、集落のなかの無防備な農地(菜園、麦・大豆)等をわかりやすく図示します。



③適切な防護柵の設置率を高め、集落内の「エサ資源量」を低減

- 無防備な農地はサルのエサ資源となっています。既存の防護柵の点検や機能改善、有効な防護柵を新しく設置するなどして、無防備な農地を減少させましょう。
- 適切な防護柵設置率を高めて、集落内のエサ資源量を低減することで、集落への出没が抑制されます。

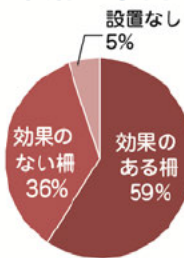


サルに無防備な農地面積が25アール未満(約14圃場:1圃場平均1.8アール)の集落で、サルの出没率が5%を超える集落はありませんでした。



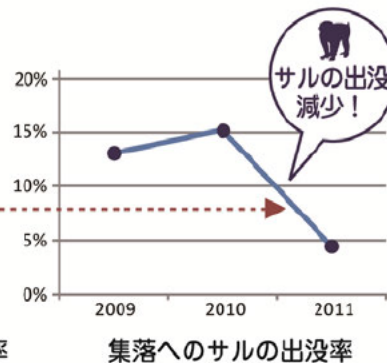
防護柵の設置率を高めた集落では...

S集落の事例



2011年の適正柵設置率

この集落では2009~2010年にかけて町事業により適切な柵が普及した。



柵を張る前は、カボチャやトウモロコシが収穫できなかったが、今ではサルが集落に滞在せず素通りします。

※適切な防護柵の例は巻末で紹介しています。

S集落で、適切な防護柵の設置率を高め、サルが利用可能な菜園を61アール(27か所)→20アール(9か所)まで減少させたところ、サルの出没率が大きく減少しました。

猿害につよい集落にむけての努力目標(その1) : エサ資源量の低減

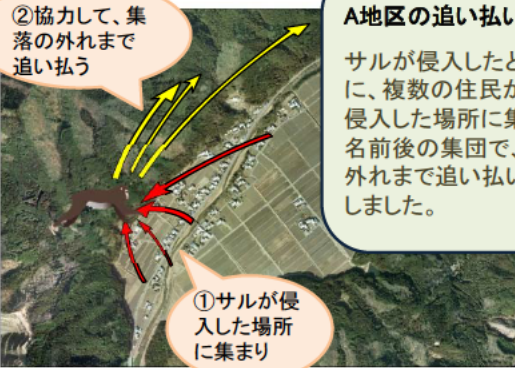
菜園が夏場の主なエサ資源となっている場合、集落ぐるみで適切な防護柵の設置率を高めて、林縁から50m以内にある無防備な菜園面積を20アール(約10圃場)以下にまで減少させる。

※サルの加害レベルや頭数、季節や集落の餌条件により効果は異なる可能性があります。

④集落で「組織的な追い払い」を実施

「組織的な追い払い」をすることで、サルはその集落を「エサが食べられない」「危険な」集落だと学習します。集落の意識共有を図り、協力して「集落ぐるみの追い払い」を実施しましょう。

②協力して、集落の外れまで追い払う



①サルが侵入した場所に集まり

A地区の追い払い方法

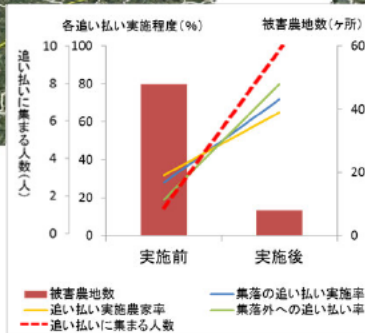
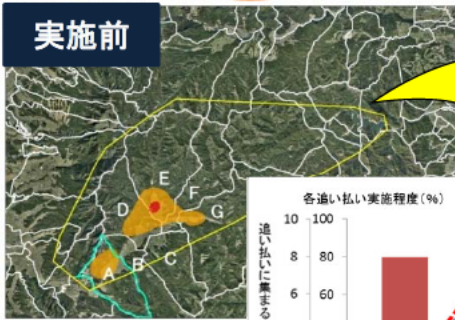
サルが侵入したときは常に、複数の住民がサルが侵入した場所に集まり、9名前後の集団で、集落の外れまで追い払いを実施しました。



集落で力を合わせた追い払いをした結果、最近ではサルが来ないし、そばやびわなど、あきらめてた農作物も復活しました。



実施前



実施後

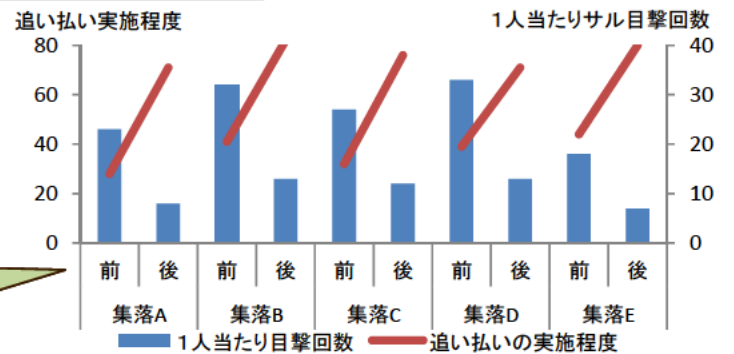


A地区の調査結果

「追い払いの実施率(目撃回数に占める追い払い回数の比率)」、「追い払いを実施する農家の比率」、「集落外への追い払い率」がそれぞれ60%以上にまで向上、「追い払いに集まる人数」が9名程度に増えた結果、サルの接近が減少し被害も低減しています。

複数の集落で同様の結果が検証できました。これらの集落で1ヶ所に集まって協力的に追い払いしている人数は4~10名でした。

複数の集落で検証



猿害につよい集落にむけての努力目標(その2) : 「組織的な追い払い」

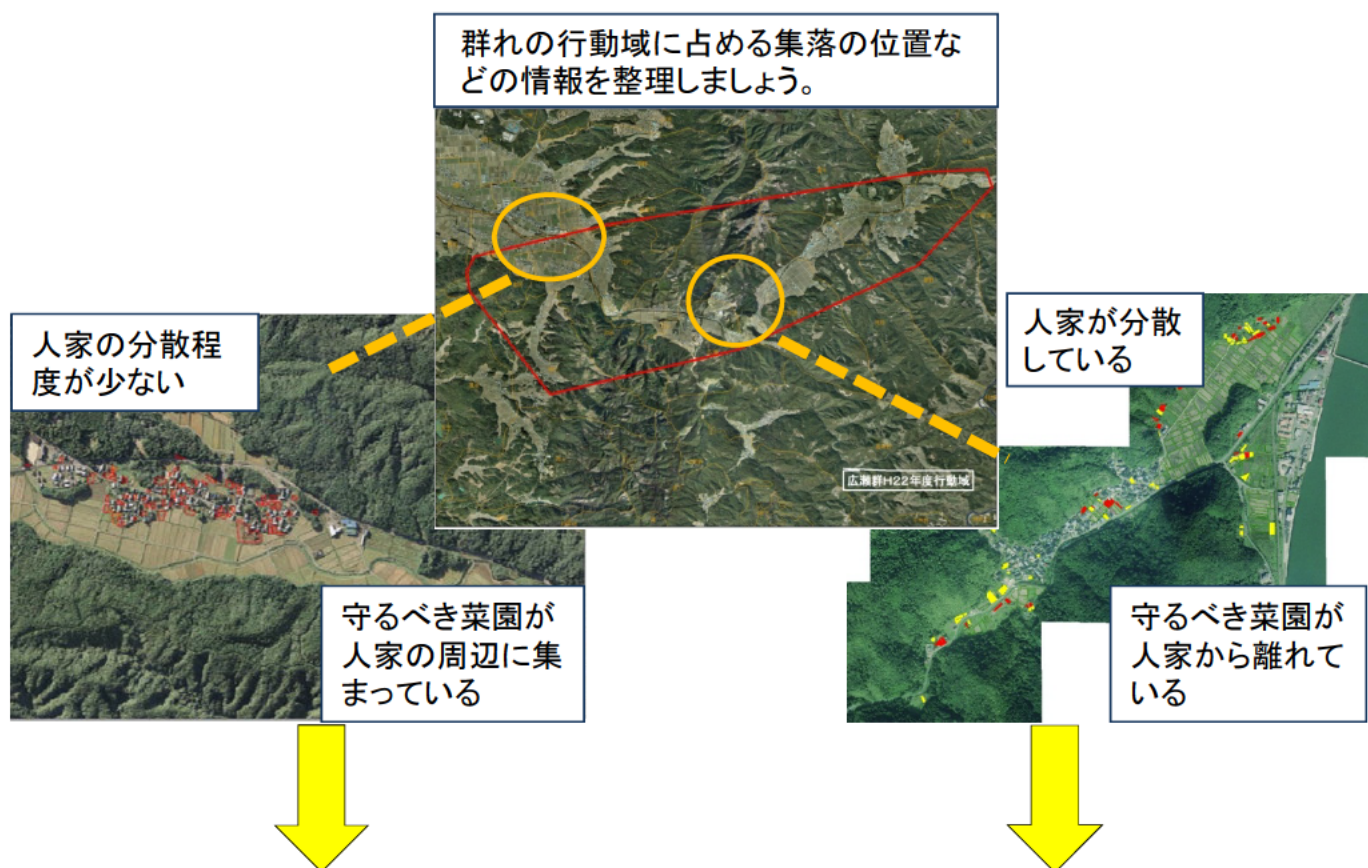
集落を1つの農地と意識して、①サルを見たときは必ず、②集落の誰もが、③サルが侵入した場所に集まり、④集落の外れまで追い払う という行動様式を目標とする。

(①、②、④の実施率が60%程度以上、③の人数が4名程度以上となることを目標とする)

※サルの加害レベルや頭数、季節や集落の餌条件により効果は異なる可能性があります。

⑤集落条件を診断し、効率的な手法を選択しましょう

- 集落へのサルの出没を抑制するためには、集落ぐるみで「エサ資源量」の低減や「組織的な追い払い」を実施する必要があります。
- 可能であれば、その両方を行うことが理想的ですが、集落の条件によっては、「追い払い」を中心に実施して成果が期待できる集落、「エサ資源の低減」を中心に実施しないと成果が期待できない集落があります。
- 下記を参考に集落の条件を診断し、効率的な手法を選択しましょう。



- ◆ 集落が行動圏の周辺部
- ◆ 農地や人家が集約的に存在
- ◆ 集落のまとまりが良い

このような条件の集落は、追い払いの効果が表れやすい可能性があります。

「組織的な追い払い」を実施しつつ、追い払いが間に合わないところを適切な防護柵で守りましょう。

- ◆ 出沒回数がもともと多い
- ◆ 菜園や果樹等のエサ量が多い
- ◆ 人家や農地が分散している

集落内のエサ量が多いと追い払いの効果が表れにくい可能性があります。

適切な防護柵を設置するなどして、集落内の「エサ資源量」を減少させたいうえで「追い払い」を組み合わせましょう。

「エサ資源量」の低減に役立つ！サルにも有効な「多獣種防護柵」の紹介

サルも侵入できない効果的な防護柵で農地を囲うことで、集落内のサルのエサ資源量を低減させることが重要です。イノシシ、シカだけでなく、サルの侵入も防ぐことができる、「多獣種防護柵」にはいろいろありますが、ここでは安価で設置が簡単な2つの柵を紹介します。



おじろ用心棒

兵庫県香美町で考案された通電式支柱を用いた電気柵。塩ビパイプにアルミテープを巻き、金属クリップを用いることで、支柱にも電気が流れ、感電率がUPします。ワイヤーメッシュ柵等と併用して利用できる多獣種柵です。

<http://www.wmi-hyogo.jp/publication/pamphleta.html>



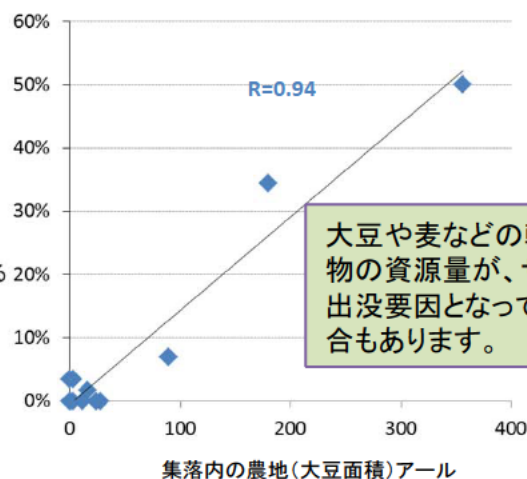
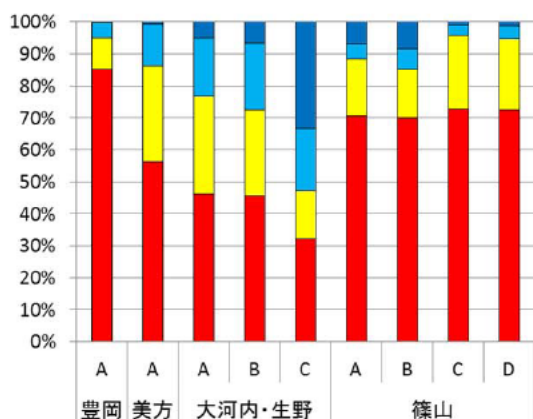
獣堀くんライト

山梨県農業総合研究所で開発された、農業用のダンポールと防鳥網、電気線だけで設置できる簡単な多獣種柵です。

<http://www.pref.yamanashi.jp/sounou-gjt/documents/light20120711.pdf>

地域特性を把握し、適切な対策を選択しましょう

集落依存度や個体数は群れによって異なります



地域や季節によってサルの出没要因は異なることが予想されます。また、対象となる群れや生息環境によって対策の効果も変わってくることもあります。このパンフレットをもとに、地域特性を把握し、適切な対策を選択しましょう。

このパンフレットは平成22年度新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業(持続的な農業を展開するための鳥獣害防止技術の開発(2010-2012))により実施した、「猿害につよい集落の環境及び人的要因の解明」の成果の一部です。